

1. 背景とねらい

一時鎮静化していた腐らん病は再び多発傾向にあり、わい化栽培においても被害が問題になってきた。わい性樹は主幹が細いため、病斑が進展すると樹の切断を余儀なくされる。また主幹部から側枝が多数生じていることから、病患部の削り取りの作業性を悪化させる。そこで、胴腐らの早期発見とこれに基づく早期削り取りを行うために、発生の仕方、発生部位、発生時期などの発生特徴を調査した。その結果、腐らん病多発園における胴腐らの発生特徴が明らかになったので、指導上の参考に供する。

2. 技術の内容

1) わい性樹の胴腐らの発生特徴

(1) 胴腐らの発生部位 新しく発生する病斑(新病斑)のほとんどは側枝基部付近と側枝切口癒傷組織部に限定される。

(2) 胴腐らの発生時期 新病斑は3月中旬に形成され始め、4月には盛期となり、5月中旬に発生が終息する。

(3) 伝搬方法 病斑上で5～6月に形成される柄胞子が伝染源となり、翌春に側枝基部付近や側枝切口癒傷組織部が発病する。

2) 対策

胴腐らの被害を回避するために、休眠期及び4月中～下旬に2～3回巡回し、主幹部の側枝基部や側枝切口癒傷組織部の新病斑を見つけしだいに削り取り、殺菌塗布剤を塗布する。

3. 指導上の留意事項

1) 胴腐らの発生部位としては側枝基部付近、側枝切口癒傷組織部以外に前年発病部や処置病斑からの再進展、主幹切断部(胴腐らのため主幹部を切断した切口)、樹皮の亀裂部がある。

2) 多発園では前年発病部や処置病斑からの再進展病斑が多い。この再進展は3月に認められるので、せん定時から注意して早期発見に努める。

3) 初期病斑であれば、削り取って殺菌塗布剤を塗布する作業は5分以内に終了する。

4) 開花期ころから葉の繁茂などで病斑を見つけにくくなるので、この時期までに病患部を処置する。病患部の処置が遅れると樹が枯死するばかりでなく、柄胞子が分散しまん延が激しくなる。

5) 胴腐らは樹によって発生量が著しく異なり、1樹に数個の胴腐らが生じるなど集中的な発生を示す。胴腐らを1個見つけたならばその樹をマークし、注意して観察する。

4. 試験成績の概要

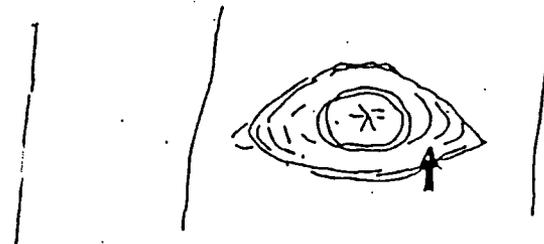
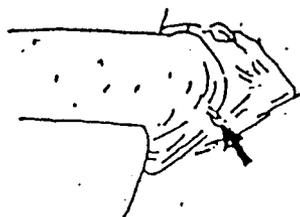
表1 わい性樹の胴腐らんの発病部位

胴腐らんの発病部位 病斑の区分	1990年		1991年	
	該当数	割合	該当数	割合
		%		%
側枝基部 (新)	29	37.2	40	45.4
側枝切口癒傷組織部 (新)	10	12.8	23	26.1
前年発病部の再進展	21	26.9	2	2.3
処置病斑の再進展	7	9.0	10	11.4
枝腐らんからの再進展	4	5.1	2	2.3
主幹切断部	6	7.7	4	4.5
粗皮、亀裂部	1	1.3	7	8.0

調査地：二戸市

表2 胴腐らんの新病斑発生時期 (1990年)

発生部位	新病斑発生数及び累計割合 (%)						
	3.19	4.19	4.24	5.9	5.24	6.11	7.7
側枝基部	10	5	7	1	6	0	0
側枝切口癒傷組織部	5	1	3	1	0	0	0
合計	15	6	10	2	6	0	0
累計割合	38.5	53.8	79.5	87.3	100.0		



↑：発病部位

図1 側枝基部付近の発病

図2 側枝切口癒傷組織部